

リテラリー・クリティシズム

(芸術・文芸・映画評)

D i a l o g u e 『タコピの原罪』

『タコピの原罪』は、タイザン5による漫画作品で、『少年ジャンプ+』に二〇二一年から二〇二二年にかけて短期連載された。二〇二五年にはWEBアニメとしても配信されている。

マンガを読んで素直に引き込まれたことから、弥生さんとのZOOM会議で話題にし、感想を送ったところ返

事が返ってきた。それをきっかけに、何度か対話を重ねることになった。

「タコピートの原罪」という作品に向き合うことは、たしかに心の体力を要する。だが、その重さを引き受けながらも、作品の中にある問いを見逃さずに捌き上げようとする姿勢には、誠実なまなざしを感じた。

原作を読まずにアニメだけを見て感じたこと——それは、制作者たちが映像として表現しようとした「想い」を、より直接的に受け取るという意味で、むしろ貴重な視点かもしれない。

興味深いのは、感想として始まったやり取りが、次第に「読み」へと変わっていった点である。

自分の受け止めを他者の批評に照らし合わせ、もう一度作品を見直す。その往復の中で、ただの感想がいつしか思考の深みへと沈みこんでいく。

この文章は、まさにそうした「対話のあとに残る思索」をたどる記録でもある。

ここでは、そのやり取りを通して見えてきた「原罪」と「救い」のかたちについて、もう少し静かに考えてみたい。

I 『タコピーの原罪』の原罪についてChat GPTに聞いてみた

『タコピーの原罪』の「原罪」は、作品のテーマや展開を踏まえると単なる「悪事の原因」ではなく、もっと根源的で抽象的な意味を持っています。

1. 文字通りの「罪」ではない

キリスト教における「原罪」は、人類が生まれながらに背負う避けられない過ちや欠陥を指します。

タコピーは地球の倫理や人間関係を知らず、「ハッピーにする」という目的で行動しますが、その善意がむしろ悲劇を招くことになります。

ここで重要なのは、タコピーが悪意を持って行動したわけではないことです。

2. 「原罪」の候補として考えられるもの

無知からくる介入

人間の複雑な感情や事情を理解しないまま、ハッピー道具で安易に解決しようとしたこと。

↓ 結果として、もともとギリギリのバランスで保たれていた人間関係を崩壊させた。

責任感の欠如

「助けたらもう大丈夫」と思い、その後の影響や感情の連鎖を想像できなかったこと。

↓ 無自覚な加害者となる。

他者を “自分の価値観” でハッピーにしようとしたこと

相手が本当に望んでいる形を聞かず、価値観を押し付けてしまう。

↓ これは現実世界でも「善意の暴力」としてよくあるテーマ。

3. 抽象的にまとめると

タコピーの原罪は、

「相手を理解せず、自分のやり方で幸福を押し付けたこと」

だと思います。

この「原罪」は、異星人だからではなく、人間も誰しもがやってしまう可能性がある普遍적입니다。だからこそ読者に強い余韻を残すテーマになっています。

時間軸で見る「原罪」の構造

① 出会い

「タコピー、しずかちゃんと遭遇

・ 「悲しい顔をしている↓助けたい」と思う

・ ここで既に “相手を知らずに手を出す” 芽がある

② ハッピー道具の安易な使用

「道具でいじめを解決しようとする

・ いじめの背景（家庭環境・人間関係の複雑さ）を無視

・ ↓ いじめの形が変化、事態が悪化

③ 取り返しのつかない介入

「「命」や「時間」に関わる道具を使う

・ 本人の意思確認をしない

・ 一時的に解決したように見えるが、

現実世界での因果や感情の流れが大きく歪む

④ 崩壊の連鎖

「周囲の人間関係が次々と壊れる

・ タコピは「なぜ？」と困惑するが、

根本原因が自分の介入にあることを理解できない

⑤ 最終的な認知

「すべての出来事の発端に自分がいると気づく

・ 善意でやったことが、最大の悲劇の原因になったと悟る

図解（原因 ↓ 結果）

「無知」



「ハッピー道具を使う」



「人間関係のバランス崩壊」



「悲劇発生」



「善意が“罪”に変わる」

まとめ（抽象的な定義）

タコピートの原罪とは

「他者を理解せず、自分の価値観で幸福を押し付けたこと」

そして、その無知から生じた行動の連鎖が悲劇を生み出したこと。

これは「異星人だから特別」という話ではなく、

人間にも普遍的に当てはまる構造です。

だから読者は「他人事」ではなく感じてしまうわけです。

因みに、漫画家の山田玲司氏は、自身のYouTubeチャンネルで、この作品について、「ドラえもん世代に対するZ世代からの回答」と言っている。

「空地に土管がある世界観」「タコピー」「ドラえもん」「しずかちゃん」という、ドラえもんのシチュエーションで、ハッピー道具が悲劇を生む矛盾

Ⅱ 弥生宗乙による感想

■はじめに

この文章は分析とか研究ではなくただの感想である。

アニメ作品としてのクオリティは全ての面において高く、後年まで語り継がれるべき傑作である。

ただし、それは必ずしもテーマが深淵であるという話ではなく、ある種の「怪作」と呼ぶべきものであるのかもしれない。

そして、それはあまりにも悲しく、絶望しか感じさせない作品であった。

■ドラえもん(世代)とタコピー(Z世代)

AIの回答の中に「山田玲司氏は(中略)この作品について、「ドラえもん世代に対するZ世代からの回答」

と言っている」とあるが、ウィキペディアにも「作者のタイザン5自身も「陰湿なドラえもんをやりたいと思ったことがきっかけ」と明言している」との記述がある。

この作品が「ドラえもん」及び山田が言うところの「ドラえもん世代」に対する何らかの批判的もしくは評論的要素を持っていることは間違いない。

しかし、それがストレートな批判であると考えることには賛成できない。真正面からの批判であるにしては、結末があまりにも弱く、甘いからだ。

それにしても、あの訳の分からない気持ちの悪いハッピーエンドは一体何だったのか。歴代アニメの中でも最も意味不明で、一切の論理や整合性が提示されない終わり方。

結果的に上手くいきましたと言う以外無いのだが、それがどこまで作者の意図的なものであるのかが良く分からない。

たとえばテレビ放送時のエヴァンゲリオンも非常に難解な終わり方をしたが、そこには作者の主張が読み取れた。

あえて言うなら、タコピーの終わり方は、まったく答えを出そうとしない、すべてを無気力に放棄したと言うしかないのではないだろうか。

Z世代からドラえもん世代への回答とは何を意味しているのか。

それはつまり、今の若者達が生きている世界は、ドラえもんの世界のように、なんでも都合良く平和的に解決できる世界ではない、というアンチテーゼだということなのかもしれない。

しかし、その問題自体に答えが出ないにしても、なんらかの答えを見いだそうとする努力を欠如させるなら、それはアンチテーゼどころか、たんなる皮肉程度にしかならないように思う。

より強く言っても、それはせいぜい、理不尽な世界に生まれ生きていかねばならない可哀想なZ世代のルサンチマンに過ぎない。

そもそも、世界はずっと一貫して理不尽なものだった。どの時代であっても、多くの人は理不尽な人生を強いられた。

ただひとつ言えることはある。

六〇年、七〇年の安保闘争に恐れた政府・自民党は教育の場から政治を排除する徹底した弾圧体制を作り出した。

それは若者達の腐敗した社会への異議申し立てを暴力的にねじ伏せるものだった。

その中であつた子供達、つまり一九六〇年代に生まれた者たちは、非政治化教育を受け、三無主義に陥り、長じてはバブルで浮かれた世代であつた。

その前の戦後世代、安保世代と後の氷河期世代の間であつて、脳天気で無責任でかつハッピーに生きた世代なのではある。

それはひとつの平和ボケであるが、それは作られた平和ボケである。

そうした者たちへの批判は当然あつてしかるべきではある。

とは言え、「ドラえもん世代」と作品としての「ドラえもん」は区別して語られねばならない。

少なくとも作者の藤子・F・不二雄はもっと理不尽な時代を生きた人であり、実際の作品「ドラえもん」の思想は、ドラえもん世代の思想やあり方とは違う。というよりむしろ三無主義的な無責任を批判する意図を含んだ作品であるとさえ言える。

作品としての「ドラえもん」は一見、ほんわかとのどかな世界に描かれているが、実際にはそんなに甘い世界

でもない。

作品「ドラえもん」の各エピソードの結末には、基本的になんらかの解決策が与えられて、騒動は解決するわけだが、それは主人公たちの痛みを伴うことが多い。

たんに「ほんわか」解決するわけではないのだ。

もちろん児童向けマンガである以上、過激な表現にはならないものの、子供達の世界においては手ひどい打撃と言って良いような結末である。

それに対して「タコピー」には解決策が提示されることなく、とってつけた結末を、なぜか不合理、偶然と言えないハッピーエンドにせざるを得なかった。

残念ながら、私はこの最終回にはまったく共感できなかった。

ネット上に「号泣した」という視聴者の感想が上がっているが、なぜ？という疑問しか湧かない。この問題については、最後にもう一度考える。

■タコピーの「原罪」とは

タイトルに「原罪」とある以上、原罪の考察を避けて通るわけにはいかない。

ましてや友人田畑氏からの問いは『タコピーの原罪』の原罪について」なのだから。

原罪とは言うまでもなく、キリスト教の最も重要な教義である。

唯一神が作り出した最初の人間アダムとエヴァは、楽園で苦痛無く暮らしていたが、無垢なエヴァは邪悪な蛇の誘惑に負けて、禁断の果実を口にする。禁忌を破ったアダムとエヴァは楽園を追われ、その子孫である全ての人間は生まれた時からこの罪を負うことになった。

この罪を消すことが出来るのは唯一神たる神だけであり、人は神と主従の契約をして、従順に仕えねばならない。

そこに神もしくは神の子であるキリスト（救世主）が地上に遣わされる。これがイエスである。

イエスは神もしくは神の子であるから、そもそも原罪を負っていないのだが、衆生の原罪を身代わりとなって背負い昇天していく。

キリスト教の教義を厳密に解釈することなど不可能なので、この辺にしておくが。ましてやユダヤ教やイスラム教については全く知らないのでお許し願いたい。

まあつまり、原罪とは逃れられない罪であり、超越的な支配者（主）である神だけが許すことが出来る。特にキリスト教においては、そうした人間をキリストが救うという構造となる。

ここでA Iの回答はいったん置いて、作品のストーリーからタコピーの原罪とは何かを考えると、おそらくそれは、二〇二二年のまりなが放った「しずかを殺しておけば」という一言を実現しようとしたタコピーが禁忌を破って、ハッピー星にひとり帰還し、タイムマシンである大ハッピー時計を起動させようとしたことであろう。

これに対して星の統括者である「母」はタコピーの記憶を消し、永久追放の処分を下したのである。

原罪を犯したのがタコピーであり、神が「母」であるなら、蛇はまりなであると言うことになる。

それではキリストはどこにいるのか？

キリストは現れない。

それでは、キリストの存在しない原罪は原罪と呼べるものなのだろうか。

これはむしろ原罪と言うより、仏教における業と呼ぶべきものではないのか。

業は人間に必然的に備わるものであり、それは誰かが救ってくれるものではない。

業は自力で解脱するしかないものだ。

しかしそれは、別の言い方をすれば自分の力で解脱できるものであるとも言える。

「救い」は自分の力ではどうにもならない神ではなく、自らののである。

タイトルが作品の全体像を表示しているとすれば、当然この作品のテーマは「原罪」であり、それはAIが回答するように、無知で独善的な善意の暴走と言うことになるが、それはあまりにも一般的、表面的、最大公約数的解釈に過ぎないような気がしてしまう。

本当に視聴者はこの作品の「原罪」に注目するのだろうか。

私はむしろ、この作品で一番目を引くのはタコピーでも、その原罪でもなく、まりなやしずかの狂気の方だと思う。

そしてそれはタコピーが生み出したものではない。

まりなは初めから陰湿で執拗で狂気に満ちたイジメを行っているものであり、しずかの狂気もタコピーが作ったというより、まりなの暴力からの解放によって元々隠されていた狂気が出てきたのだと読み取れる。

むしろ、この作品の本質的テーマはそこにこそ隠されているのではないのだろうか。

■本質的なテーマは何か

私は、この作品の本質的なテーマはかなり古典的なものだと思う。

それは戦後の映画でさかんに取り上げられたものだ。

若さ、無邪気、短慮、無軌道、暴走、暴力、焦燥、未熟な正義感と善意と愛、登場人物を取り巻く理不尽な世界。

それはヌーヴェルヴァーグやアメリカン・ニューシネマの頃によく取り上げられていた。

「大人は判ってくれない」、「俺たちに明日はない」、「太陽がいっぱい」、「勝手にしやがれ」、「太陽の季節」
etc. etc.

「タコピートの原罪」の世界は不条理である。

主人公達はあらかじめ理不尽の世界に放り込まれている。

悪いのは大人達、親たちや教師であり、タコピートを含めて、しずか、まりな、東たちは与えられた状況の中で精一杯全力で生きているだけなのだ。

しかしそれは大人達が作り出した不条理の中で歪められざるを得ない。

そして必然的に破滅的な結果へと至っていく。

前述したように、これがZ世代の感じる理不尽な世界であり、そしてそれは今に始まったものではなく、人間の歴史の中で常に存在してきたものののだ。

■核心的問題

この作品のテーマが古典的なものとしても、しかし、それでいてその構造は根本的に異なっている。

私を感じる核心的問題はそこにある。

「ドラえもん」や戦後映画の根幹的構造と「タコピートの原罪」との決定的な違い。

それは、子供は大人に一切反抗しない、という点だ。

ニューシネマやヌーヴェルヴァーグの頃の映画では、（大人達から見たら）理由無き反抗をする恐るべき子供達が描かれた。

それは当然旧世代に対する新世代の反抗、反乱がテーマであり、それこそ不健全な映画に健全性が付与されていたのだと言える。

一方の「ドラえもん」も、多くのエピソードで、親や教師の支持や命令（たとえば宿題やお手伝い）を、いかにかわして自由を得るかという「抵抗」がモチーフであった。

しかし「タコピーの原罪」では、せいぜいまりなが母を殺して自分も死ぬとか、しずかが実父の娘を誘拐するというくらいしか、理不尽な世界に対して戦う場面がない。

しかし、それも正当防衛であり、直後に自分を責めて自殺したり、誘拐した娘達を事実上無傷で返したりと、本質的な抵抗でもない。

先に、この作品の結末について、解決しようという意志が感じられないという主旨の点を指摘したが、作者も主役である子供達も、皆この不条理をそのまま無抵抗で受け入れ、最初から最後まであきらめきっているのである。

あきらめないとは何を意味するのか。

それは、偉大なるキリストの救済を待つのではなく、自ら解脱しようともがくことだろう。

もちろん解脱の先にバラ色の世界が存在しているわけでもない。そこから新たな葛藤が生まれるに違いない。結局は破滅するかもしれない。

しかし、それでも若者はいつの時代でも抵抗してきた。

遙か遠く、ギリシア時代でも大人はそれを嘆いている。

こうした若者の無力感やあきらめは、当然教育の中で作られてきたものに他ならない。まさに七〇年代以降の非政治化教育であり、マルバツ式教育のもたらしたものと、私は思う。

それが様々な意味で、いわゆる失われた三十年の根本原因になったとも思う。

世界は変わるし、変えられるものだという、人類史の本質を知らない（もしくは奪われた）子供達が、大人の社会が作り出した檻の中で、ただただ閉塞感にとらわれ、同じ悩み、同じ苦しみを持った、本来友人や同志となりうる者たち同士で傷つけ合う。

まさにこれが「タコピーの原罪」の世界であり、Z世代の世界なのだ。

この作品の中に「バカだから」というフレーズが何度も出てくる。

これこそ世代を象徴するあきらめや無力感の表出だろう。

私の世代なら、そうじゃない、そんなこと言うな、お前はただ奪われているだけだ、そこに気付け、あきらめるな！と言いたくなるが、おそらくZ世代にとっては、これがそのまま本当の真の告白として聞こえるのかもしれない。

それはドラえもん世代のすぐ下から始まった世界観。

牙を抜かれてしまった若者。

世界は変わらないと思わされてきた若者。

耐えるしかないと刷り込まれてきた若者。

その苦悩の叫びこそ「タコピーの原罪」という作品なのだろう。

しかし、それが今、不気味な黒いうねりの中に飲み込まれようとしている。

支配者への抵抗という選択肢をあらかじめ奪われた者たちは、超越的な救世主を望んでしまう。

自分を助けてくれるスーパーヒーロー。

その一方で自分の足を引っ張る隣人。

同じ境遇のはずの隣人に対する憎悪の増殖。
まさに「バカだから」開き直っても良いのだ。

論理性も広い視野もいらない。

それが、参政党ブームに見られる新しい右派＝自己ファースト層だ。

彼等には正しい意味での自己批判がなく、自己の絶対的肯定か自己卑下かの二者択一しかない。

かつて新しい再生への過程として語られた自己否定という言葉も、いまや自己破壊としか理解されない。

新たな価値観を得るプロセスを与えられなかった世代、オルタナティブの存在を知らされることの無かった世代は、タコピーの原罪の世界を何度も何度も繰り返し返し、そしてやがて破滅の結末を迎えるのではないだろうか。そこには偶然の、結果的にそうなったというような、ハッピーエンドは無いだろう。

Ⅲ 田畑久志による応接

弥生様

お忙しい中、長文の感想をお寄せいただき、誠にありがとうございました。

概ね、私が感じていた、作品を観た感想としての無力感や焦燥感を共有していると理解しました。

一つ訂正をしておくなら、ChatGPTが「山田玲司氏は（中略）この作品について、「ドラえもん世代に

対するZ世代からの回答」と回答したのではなく、たまた私がYouTubeで山田玲司のチャンネルを観て、文書に付け加えたに過ぎません。

ともあれ、弥生様の感想について、私が思った事を記しておきます。

□現実とメルヘンの境界について

まず、文中での「あえて言うなら、タコピーの終わり方は、まったく答えを出そうとしない、すべてを無気力に放棄したと言うしかないのではないだろうか。」という部分。

この作者（タイザン5）が何者か、素性が一切明かされていないので、彼（彼女）の思想を推し量ることができないのですが、少なくとも私には、「無気力に放棄」したのでは無いと思っています。

作品としての「タコピーの原罪」は、家庭環境に複雑な問題を抱えた主人公三名の葛藤を描いています。図柄やストーリー構成において、終始「暗い」印象を持ちます。そこに異物としての異星人「タコピー」が登場するのですが、この「異物」のフォルムや立ち居振る舞いが、とにかくメルヘンな訳です。そしてタコピーの持っている「ハッピー道具」なるアイテム、何の有用性も感じられないと思っていたものが、実は人を殺める凶器になってしまします。

私は、メルヘンが現実との接点を持つ契機、そして、タイムリープによって事象を「やり直す」という行為を見ながら、タコピーさえ居なければ、案外うまく社会がまわっていったのではないかと感じていました。

現実の社会は理不尽ですし、不条理です。他の誰よりも無関心な担任の先生を含め、一同級生の家庭環境なんかに一喜一憂するような精神性は、クラスメイトの誰も持ち合わせてはいないでしょう。

「おせっかいな異星人」というタコピーという造形は、この無味乾燥な社会に対する理想形なのかも知れませ

んが、メルヘンの領域に留めておいた方が良いのです。

また、タイムリープというと、「涼宮ハルヒの憂鬱」における伝説の「エンドレスエイト」や「魔法少女まどかマギカ」の暁美ほむら等を思い浮かべますが、ハルヒにせよ、ほむらにせよ、「夏休みを満喫したい」だとか「自分の愛する人を守りたい」という、自分のエゴで多用するから、矛盾がどんどん膨らみ、もはや修復できなくなるというパラドクスに陥ります。タコピーのハッピーカメラも、使えば使う度、悪い結果になっていく。このジレンマに視聴者は苛まれる訳です。

ただ、現実干渉して使えなくなってしまったハッピーカメラを、自身の命と引き換えに起動させ、自分抜きの世界で最後のタイムリープを実行する段になって、ようやくタコピー不在の（メルヘンの無い）歴史を紡ぎ出すことになり、タコピーはノートの落書きの絵としてメルヘンの世界に戻る、ということなのではないかと思えます。このアニメ作品の中で私がカタルシスを感じたのは、この終盤の展開でした。

ゆえに、この作品に「答え」があるとすれば、弥生様と言われるように「しずか、まりな、東たちは与えられた状況の中で精一杯全力で生きている」と言う事に尽きるのではないかと思います。

□善悪の彼岸について

もう一つ論点として、引用しますが「ドラえもん」や戦後映画の根幹的構造と「タコピーの原罪」との決定的な違い。それは、子供は大人に一切反抗しない、という点について。

弥生様は、ヌーヴェルヴァーグや七〇年安保闘争の引用もされていますが、親（世代）に反抗する前衛党思想家「左翼」の立場に立ち、親（＝国家）に反抗しない子供（＝労働者）という図式で見ておられます。

でも、それは一方的な物の見方ではないかと思えます。私は逆にカミュ「異邦人」のような虚無感というのは

当時も存在していましたし（そういう人たちを「ノンポリ」などと評していましたが）、大方の人々は「アメリカの核の傘の下」で「親方日の丸」という社会体制の中、「ぬくぬく」と自己実現を目指してきたのではないかと思います。

弥生様も言われている「失われた三十年」というワードは、「一九九〇年代初頭のバブル崩壊後、日本経済が長期にわたって低迷した時期」とされます。経済的にも政治的にも国家が国民を庇護できなくなった、という機能停止に陥った時期ではないかと思えます。残念ながらそれは物語の舞台である二〇一六年の現在においても続いています。

庇護する側である親自身が失われている世代である以上、その子供は何が失われているかもわからない世代ということになります。当然ながら何に反抗するかもわからない訳です。

まりなの母親は夫依存症で、浮気をされても離婚することができず、その鬱憤を娘のまりなにぶつけます。まりなは父親の浮気相手であるしずかの母親憎みに、その娘しずかに八つ当たりをする訳です。

このように、やりきれない怒りや憎しみをぶつける捌け口が、謂れもない娘だったり、同級生だったりするのは、とても理不尽な事だと思います。

だからといって正論を押し付けることもできません。執拗な子供虐待に耐えかねて親を殺害してしまったまりなの所業を糾弾できるでしょうか。また、クラス内の虐めがエスカレートし、自身の愛犬を保健所で殺処分されてしまった上、自暴自棄になって首吊り自殺してしまうしずかの決断を止めることができるでしょうか。

大人に反抗しないのではなく、自分なりに受け止め藻掻くなかで、何とか解決策を求めようとしているZ世代なりの答えなのではないかと思えます。それがいかに悲劇的であろうとも、寄り添って見守っていくしかないのではないのでしょうか。

私たちは、失われる前のバブリーな社会（恩恵は享受しておりませんが）を世代として経験しています。その意味では俯瞰的な物の見方ができる訳です。ゆえに今の社会にはこれが足りないとか、これに抗うとか一方的に押し付けるのではない関係を築いていくことも大切なことではないかと思います。

□タコピーの陥穽を超えて

以上、所感となります。急かせて書いて頂いた割には、気の利いた事も言えずに申し訳ございました。最後の参政党の主張に関しては、特に異議はありません。とにかく彼らはグロテスクで気持ち悪い。物事に對する偏向が酷すぎる。せっかく「幸福実現党」なるオウムの焼き直しみたいな右翼がいなくなったと思ったら、またぞろぞろ湧いてきて。

弥生様が言われる「自己ファースト層の彼等には正しい意味での自己批判がなく、自己の絶対的肯定か自己卑下かの二者択一しかない。」という指摘は、特に最近の社会を見ていて顕著だと思います。

自分さえ良ければ他者を追い落としても構わず、他人を自己実現の手段としています。このような無責任性の対極に、このアニメの主人公タコピーはあります。

ただ、タコピーの「ほっとけない」という気持ちは、相手への愛情や思いやりから生まれることが多く、度が過ぎると、相手の自立を妨げたり、自分の負担が増えたりすることになります。

大切なのは、彼我の距離感ということなのでしょう。

どうも、ありがとうございました。

Ⅳ 弥生宗乙による返信

「タコピー」感想へのご指摘に応えて

拙文にご指摘をいただき、ありがとうございました。

大変参考になりました。

ご指摘いただいて、鑑賞が粗いところがあつたということに気づきました。

ただ、時間的制約もあり、また正直に言えば作品を見ることが精神的にかなり大きな負荷であることもあって、まだ全体を精査する余裕がありません。

とりあえず、最終回だけを見直して、お答えしてみたいと思います。

◆ 結末の評価の訂正

…文中での「あえて言うなら、タコピーの終わり方は、まったく答えを出そうとしない、すべてを無気力に放棄したと言うしかないのではないだろうか。」という部分。（中略）少なくとも私には、「無気力に放棄」したのでは無いと思っています。

この部分については、確かに乱暴な論だったと反省しています。

なおこの際言い添えますが、ぼくは原作マンガを読んでいないので、ぼくが書いているのはあくまでアニメの感想です。なので作者と見なしているのは基本的に監督もしくはアニメの製作スタッフです。

以下に最終回でのシーンをいくつか書き出してみます。

・最終回冒頭、夜道をまだ子犬のチャッピーを抱いて歩いている幼女のしずか。ただし、そこに重なるモノローグはおそらくずっと後のしずか、もしくは時空を越えたとしずかだと思われる。

しずか「困った時はお星様をお願い。いなくならないお父さん、美味しい給食、意地悪のない学校……でも本当

は何が欲しかったんだっけ」

・しずかの異母妹誘拐事件の後、しずかとはぐれたままのタコピーが空き地の土管の上に座っていると、東が現れる。タコピーは一緒にしずかを探して欲しいと懇願するが、東はそれは出来ないと断る。彼の家庭も彼の告白でズタズタになっていたのだ。

東 「三人で遊べて楽しかった。生まれて初めてあんな学校が楽しみに思えた。それは友だちだったからだ

「お前は脳天気でバカでゴミだけど、優しい。使えないどうしようもない能なしで役立たずの僕にすごいって言ってくれた

「バカだから本心だ。それくらいわかる。だからありがとって言いきたんだ」

・東と訣別したタコピーは、そのままずっと土管の上から動くことなく、考え続ける。

タコピー「助けてあげようとするだけじゃ、きっと違った。」

・しずかがやっと空き地に現れる。謝るタコピーに怒りを爆発させるしずか。踏みつけ、石で殴りつける。「ど

うすればよかった？」と叫び続ける中で、一言だけ小さな声でつぶやく。

「しずか「大人なんていないのに」

・しずかと二人だけで放浪する中で、二人は二人だけの「幸せ」を感じていくが、いつも泣いているしずかを見てタコピーは自分の命と引き替えにしずかを過去に戻す。

タコピー「ぼくの大切な君へ。本当に欲しいものが手に入るように……」

・過去に戻ったしずかに、学校でまりなが絡もうとしてドクダミの花を付けていないと言いかけ、何のことか分からなくなってしまい、氣勢を削がれて止める。

・夜の公園でまりながシャーペンをしずかに突き立てようとした時、しずかのノートに書かれていたタコピーの落書きを見てタコピーを思い出し、「おはなしがハッピーを生むんだっぴ」と二人同時につぶやく。（この「おはなし」は対話の意味）

タコピーの
モノローグ 「それが一番大切なこと」

ここから二人は一緒に夜道を帰り、エンドロールが流れる。エピソードから推察すると、ここで二人は友人になる一歩を踏み出したと思われる。

・白地に「2016年のきみたちへ」というサブタイトル。（これは第一話の「2016年のきみへ」、第五話の「2022年のきみへ」のエコーであり、言うなれば結論である）そこにタコピーのモノローグが重なる。

タコピー「もうひとりじゃない君達が大人になれるように」

こうして書き出していくと、なかなか良い話だと思ひ直します。

安易な結末という論は訂正したいと思います。

タコピーの最後の魔法のような力は、つまり無垢であるが故に危険でもある純真が昇華したものと考えられます。そしてそれは「絆」の生成として機能したのだと思います。

タコピーが人々を幸せにすると考えていたハッピー道具は何の意味も持たなかったけれど、タコピーの自己犠牲によって生み出された「絆」こそが、しずかたちが「本当に欲しかったもの」だったという結論なのでしょう。

その絆は「おはなし」⇨対話から始まるものであり、友だちという形で定着していく、という描かれ方です。

もう安易という言葉は使いませんし作劇的にも評価しますが、それでも理想論、ご都合主義的と感じるのは仕方ありません。とは言え、それが創作作品の本質でもあるので、否定することはしません。

◆タコピーの存在の必要性

私は、メルヘンが現実との接点を持つ契機、そして、タイムリープによって事象を「やり直す」という行為を見ながら、タコピーさえ居なければ、案外うまく社会がまわっていったのではないかと感じていました。

そう感じるのは当然で、作者（たち）がそういうものとして作品を作っているのだから真っ当な感覚だとは思いますが。

ただ、ぼくは、

…ようやくタコピー不在の（メルヘンの無い）歴史を紡ぎだすことになり、タコピーはノートの落書きの絵としてメルヘンの世界に「戻る」…

という見方はとりません。

「ノートの落書きの絵」はただの落書きではないからです。

これはタコピーが自分の命と引き替えに残した「魔法」であって、上記で抜き出したいくつかのエピソードを見ても分かるように、最後に過去に戻ったしずかたちは、タコピーが存在しなかったままの世界にいるわけではないのです。

そこには物理的にも精神的にもタコピーの痕跡が残っており、そしてそれが彼女たちの対話と和解と友情を引き出します。

ぼくは逆にタコピーが存在しなくても、そのままであれば悲劇的な展開を迎えただろうと、このアニメを見ながら感じていました。

彼等の本質的問題は、良い悪いはともかく彼等自身の中に存在しており、それはタコピーが関わる関わらないに限らず、どこかで噴出しただろうということです。まりなは二〇一六年に死ななかったでしょうが、それはつまり、タコピーが最初に来訪した二〇二二年の世界になったということ、まりなは（おそらく、しずかや東も）救われていません。

それは、作品自体から読み解けば、彼女たちの間に「おはなし」が無く「ともだち」にもなっていないからです。

タコピーは絶対的に必要な存在であり、それは残念ながら失敗の繰り返しも含めて、必要なプロセスであったと言うしかありません。

そこにはもちろん田畑さんも指摘しておられるように、「ドラえもん」的に解決し得ない現実の示唆として、

ハッピー道具には意味がないという設定はあるわけですが、だからと言って、タコピー＝無知にして無垢な純真（というメルヘン？）が不要であるわけではないことだと思っています。

ここで、ぼくが「タコピーの最後の魔法」と呼んでいるものについて、もう少し詳しく述べると、それは社会が若者に与えることが出来なくなった「絆」、より正確に言えば「他者の存在」を与える何事かであると考えます。

孤立し孤独化した「孤人」を社会の中における「個人」にするものは、自分と同等の価値感の上に立つ他者の存在を認識することです。それを与えたのがタコピーの「魔法」であったと思うのです。

タコピーの失敗の先の昇華によって、しずかとまりなは「おはなし」をすることが出来るようになり、「ともだち」となり、おそらく最悪のシナリオだけは回避したのだと思います。

たぶん現実の悲惨な状況は変わっていないと思いますが、それを変えることは出来ない（とタコピー自身が言っている）わけで、あとは彼女「達」が「ともだち」として支え合いながら、その先の未来を作っていくしかないかもしれません。それがこの作品の結論なのでしょう。

これを自称作家のぼくの視点で牽強付会に言えば、それは「本」であり「物語」のように見えます。学校などに居場所のない子供達は、それなりの割合でマンガやゲームやアニメなどに逃げ場を求めているのではないのでしょうか。そしてその中には「ハッピー」な世界があり、そしてそこでは社会的紐帯が描かれ、オンラインゲームで言えば現実友人が出来たりすることもあるわけです。

そうしたものを総称して「文芸」と呼ばせていただきますが、もちろん「文芸」が全ての解決策にはなりません。「文芸」は無力で役立たずです。しかしそれは何かのきっかけにはなるのです。即効性はないかもしれませんが何かの意味を持つ可能性があります。

ぼくには、タコピー＝メルヘン＝文芸という風に見えますし、文芸は人間にとって必要なものであるとも思っています。

※二〇二五年八月二十六日付けの朝日新聞一面に「不登校だった私 正反対の娘」という見出しで、芥川賞作家である金原ひとみのインタビューが掲載されていました。そこで彼女は「周囲になじめず」、「子ども時代を「地獄だった」と回想していますが、小五の頃から小説を読んだり書いたりするようになり、「小説にはそれだけに世界があって、そこに生きている人たちがいる。読んでいる時は別の世界を生きられる。「現実の世界が唯一の世界」という感覚がなくなることが、救い」だったと述べています。なおこの記事は主に生きづらさを感じる子供達に向けたシリーズのひとつのようです。

◆失敗は不可避

もうひとつ、これは言い過ぎになるかもしれませんが、失敗は繰り返さざるを得ないのだとも思います。

タコピーは善意と無知から何度も失敗を繰り返し、田畑さんに言わせればその結果はどんどん悪い方向に向かい、最悪の結果になったということになりますが、それでも人間＝人類は失敗を繰り返さざるを得ないのが現実であり、歴史的事実です。

一度目は悲劇で二度目は喜劇であることなど、マルクスならずとも分かっているのに、それでも三度も四度も悲劇的喜劇を繰り返すのが人類です。もちろんその結果はどんどん重たいものになり、やがて人類は自ら滅ぶかもしれません。

それでも人々はそこから学ぶこともあり、それはあるタイミングでは人類の進歩への気づきになることもあります。

タコピーの最後の決断は、まさに何度も何度も失敗した上で到達した結果であり、物語の上だけの話ですがそれはある程度成功したように見えます。

当初ぼくが書いたこととは大分変わってしまいましたが、田畑さんのお陰で、なんとかここまで作品を読む（見る）ことが出来ました。

◆低い自己評価

あと、せっかくなので、その他若干の問題意識を挙げておきます。

この作品において強烈に感じることのひとつは、登場人物の自己評価の低さです。

最終回の東の「使えないでしょうもない能なしで役立たずの僕」というセリフにも象徴されますが、子供達自身はダメな人間だと自らを追い込んで行きます。そして、なんとかそれを乗り越えようとして、結果的に暴走し、悲劇を生んでいきます。

ぼくもろくでなしのダメ人間で自分を全く評価できませんから、とても共感する部分ですが、ぼく自身との違いは「乗り越えよう」としない点です。ぼくは乗り越えようと思わないから暴走もしないのです。

極めて個人的な話をする、ぼくの弟は社会的に評価される仕事について、家庭も持ち、周囲の人から信頼を得た人物でした。賢弟愚兄です。しかし、彼はそれでは納得できず、自分は正當に評価されていないと不満とストレスを抱えていたようです。その結果、酒を絶やすことができず、それで結局死んでしまいました。彼は自己評価が高すぎたのか、それとも逆に低すぎたのか、表裏一体だなと思わずにいられません。

作品に戻ると、こうした主人公達の自己評価の低さの対極に、デフォルト状態のタコピーがいます。彼は無垢な純真さで、自分の正しさに疑問を感じません。（それは後半になって揺らいでいきますが。）

これが事態を混乱させたとも言えますが、落ち着いて作品を見ると、タコピーはしずかに利用され続けたと見ることも出来ます。

◆自己評価とイジメの構図

自己評価が低いということは単純なことではありません。まりなはタコピーを「ゴミクソ」と呼び、東も最終回で「お前は脳天気でバカでゴミ」と評します。もちろんどちらもニュアンスは必ずしも否定的なものではないのですが、彼等とはかく一旦は相手を見下さないといられない。それは自分が虐げられている分だけ、自分も虐げる相手を欲していると言うことです。

ある意味で、しずかがタコピーを利用するというのも、似たような事なのかもしれません。

もちろんこうしたことは、今に始まったことではなく、子供の世界には昔からよくあったことだし、言いたくはありませんが大人社会にもしばしばあったことです。残念ながららぼく自身が当事者であったかもしれませんが。

ただこういう構造はどこかで見たことがあるなど考えてみると、これは差別排外主義の構造と同じです。本来はその社会の中での格差や支配構造によって虐げられている人々が、上に反発できずに、その鬱憤を下位と見なす者や外国人に向けるわけです。そして実はそれは巧妙に支配者によって誘導されてもいるのです。

前に書いたこととの関連で言えば、日本ファーストを支持する大衆は、自分が苦しくなっているのはこの社会における搾取と格差の結果なのに、それを見ようとせず、より過酷な状況に置かれている貧困者や外国人に対する憎しみと攻撃によってその怒りを解消しようとしている、ということです。

そしてそうした土壌を築いたのは安倍極右政権の十年だったと、ぼくは思っています。

自己評価の高さ、低さが表裏一体と書きましたが、イジメも表裏一体です。虐げられる者が他の者を虐げる。

そこに欠けているものは他者の存在の認知です。

自分がされて嫌なことは他人にもしない。つまり他者が存在しそれを自分のこととして想像する力です。共感力と言っても良いですが。

それは、しずかとまりなに欠けていた力です。

タコピーは実は最初からその力を生み出すのが「おはなし」であることを知っていました。しかしそれをどうやって実現するのが分からなかった。

東は其感力はそれなりに持っていました。しかしそれを家族にすることが出来なかったし、しずかに対しても「寄り添う」ことしか出来ず、暴走を止められないばかりか、逆にそこに手を貸してしまうことになってしまった。彼は一方的にしずかやタコピーを「ともだち」と思っていたわけですが、そこには「おはなし」が欠けていたから「ひとりじゃない」友だちとして「大人になれ」なかったのです。

これは現実社会の構図の引き写しです。

でも現実にはタコピーの魔法はありません。

「おはなし」を実現させるのは非常に困難なことです。

しかし「おはなし」を実現させるのが困難なことであっても、可能性が無いわけではありません。

「おはなし」↓（本当の）「ともだち」↓「ひとりじゃない大人」（＝連帯する・できる人々）という方向が、ようするに「大人のいない社会」（＝得体の知れない何者かに支配されている社会）に対する抵抗、反抗、反逆になるのだと思います。

「大人のいない社会」とか「抵抗、反抗、反逆」という論点については、別途後述します。

◆存在しない大人

もうひとつ、最終回でしずかが口にする「大人なんていないのに」という言葉。

これは「自分を守ってくれる大人なんかいない」という意味であると同時に、本当の意味での大人がいないという意味にも取れそうです。これは田畑さんが、主人公たちを「庇護する側である親自身が失われている世代」と評するのに呼応しているかもしれません。

しかしここでの問題点は、その更に裏側に、そうした社会をコントロールするというか支配するとか、そういう力が現に存在しているという点でしょう。鑑賞者は登場人物ではないので、そうした立場でより深く考えるのであれば、なぜ大人がいないのかというところまで深掘りしていかないと、その答えは見つからない気がします。

作品に立ち返れば、タコピーはひとつの答えを出しました。

「もうひとりじゃない君達が大人になれるように」

大人がいない世界に大人を作り出そうとしているのです。主人公たちを孤立状態から脱出させ、その支え合う力で大人に成長してもらおうとしているのです。

しかしもう一度、鑑賞者たる自分に戻ってくると、本当にこの社会に大人はいないのか？それで良しとしていいのか、自分は何者なのかと考えざるを得ません。

◆助けてあげようとするだけじゃきつと違った

さらにもうひとつ。

最後にタコピーが「助けてあげようとするだけじゃ、きつと違った。」と何かを悟るセリフですが。

すごく陳腐な言い方をすると、タコピーが自己犠牲に踏み切る契機であるとか、第三者的立場から主体的立場への変化みたいなことなのかもしれませんが、どうもすっきり腹に落ちません。

だってどこまで行っても、外側からやって来たハッピー星人は地球人の主体にはなれず、助けることしか出来ないじゃないか、と思うのです。

なんだかまとまりません。何かお考えがあったら教えて下さい。

それでも一応はいろいろ考えて、だいぶ飛躍してしまうのですが、ぼくなりにもしかしたらという視点を見つけました。文末に少し触れます。

◆ ぼくの思想的立場

弥生様は、ヌーヴェルヴァーグや七〇年安保闘争の引用もされていますが、親（世代）に反抗する前衛党思想家「左翼」の立場に立ち、親（＝国家）に反抗しない子供（＝労働者）という図式で見えておられます。

まず最初に言わせていただきます。昔から（左翼運動に関わった当初から仲間内で）誤解されたことなのですが、ぼくの思想の原点は左翼にありません。

ぼくの世代論や現代史観は、一九六〇年代から七〇年代にかけて、下層労働者家庭の息子として少年期、青年期を過ごしたぼくの実感と実体験に基づいています。ちなみにぼくは高校生の頃から大学の半ばまでは反共産主義者でした。

ぼくの考えることは理論ではなく肌感覚が元になっているのです。

理論はあくまで自分の感覚を言語的に裏打ちするものでした。自分の実感や実体験を言語化するものとしてマルクスや宇野、荒岱介の理論（の一部）が当てはまったということです。

ここで自分史を語る余裕はありませんが、当時の戦旗派の学生たちは「理論」だけで世界を納得していたのかもしれない。そこには何か違和感がありました。ただその当時、それを主張できるほどの「言葉」を持っていなかったのだ、ぼくは黙りました。そのことは、その後ずっとぼくを呪縛したと思います。

多くの同志、とりわけ本部にいた同志達は理論に長け、ぼくにはとても不可能な発想で論文を書いていきました。でも、ぼくは理論を理解して活動家になったのではなく、根底には実感と実体験しかなかったのだ、とてもそこには付いていきませんでした。その代わり、ぼくは実感と実体験に基づいたマンガとか短歌とかでなんとかその場をしのいでいたのです。

そんなわけで、活動家時代はこうした自分の体験と結びついた思想を自分で自由に扱うことが出来ませんでした。それがやっと出来るようになったのは組織を離れて十年から二十年後のことです。

今頃は稚拙ながらもなんとか自分を自分の言葉で語ることが出来るようになりましたが、結果としてみれば、当時の「理論」で左翼になった人達の多くが脱左翼してしまいました。

なお、ますます話がそれてしまうので恐縮ですが、おそらくぼくの感性はいくつかの理由から一九五〇年代中期のものなのでしょう。ぼくはずっと昔から自分がこの世界、この時代の中で異物であるような感覚を持っています。

生まれてくる世界と時代が違っていったような気がして仕方ありません。

◆抵抗権・革命権の普遍性

さて、長々と自分のことを書きましたが、これは実はあまり意味はありません。

というのは、そもそもが既存社会に対する抵抗・反抗という概念は、別に左翼だのなんだのという以前に、人類普遍の思想だからです。ウィキペディアを見ると「抵抗権・革命権」は古代ギリシアの時代から理論化されてきたそうです。

近代においては自然権の中に含まれる概念となり、近代国家の憲法には基本的に抵抗権や革命権が含まれているというのが一般的な学説だろうと思います。アメリカ合衆国で市民が銃器を持つことが許されているのも、この抵抗権・革命権が保証されていることが根拠となっています。

まあ、こんな小難しいアカデミックな話をするまでもなく、現在でも多くの創作作品の中では、こうした抵抗や革命の話はふんだんに（もちろん肯定的に）描かれています。映画「スター・ウォーズ」新たな希望」を持ち出すまでもないでしょう。

ぼくがこれを問題にしたのは、だからこそです。

つまり、普通一般的な作品であれば、子供たちが大人たちに抵抗、反抗して当たり前なのです。でも、この作品では抵抗・反抗しない、それがこの作品の特色なのだと言っているのです。

ヌーヴェルヴァーグなどを例に挙げたのは、それがこの作品のテーマと比較しやすいからで、そうした戦後映画だけが抵抗・反抗を描いているわけではありません。

◆大衆と反逆

もう少し進めます。

私は逆にカミュ「異邦人」のような虚無感というのは当時も存在していましたし（そういう人たちを「ノンポリ」などと評していましたが）、大方の人々は「アメリカの核の傘の下」で「親方日の丸」という社会体制の中、「ぬくぬく」と自己実現を目指してきたのではないかと思います。

庇護する側である親自身が失われている世代である以上、その子供は何が失われているかもわからない世代ということになります。当然ながら何に反抗するかもわからない訳です。

大半の大衆は体制に従うもので、だから歴史的な社会は成立しているのです。それは前提です。

しかし、それでもいつの時代でも戦う人々、反抗し抵抗する人々はいるわけです。いま現在も闘っている人はいます。もちろんそれはいつでも少数派です。

どの時代でも、親の世代と子供の世代は価値観を共有することが難しく、故に対立をしてきました。親が復古主義者だから子供も復古主義者になるわけではなく、共産主義者だから共産主義者になるわけではありません。

親自身が虐待を受けて、子供に虐待したとしても、その子供自身が自分の子供を虐待するとは限りません。戦後映画の若き反逆者達も特異な少数派として描かれているはずです。というより全ての物語において反逆者はすべて少数派です。

それは当然のことでしょう。

しかし、前記したようにそれを描く文化が常に存在しているということが重要なのです。

こんなところで前衛論など出したくはありませんが、体制に従う圧倒的多数の大衆に対して、ごく少数の先鋭的な者たちが異議申し立て、問題提起をするということは文化として健全なことだと思います。

繰り返しますが、現代の多くの映画、小説、アニメ、その他もろもろでも、実際には反抗や反逆の物語がほとんどです。潜在的に人々は反抗や反逆という価値観を肯定的にとらえているのだと言えます。

ただそれがリアルな現実社会の問題になると、なかなか自分がその当事者にならないというのも事実ですが。

◆責める？ 肯定する？ 何をする？

その上で、しかし確かに抵抗しない人々、出来ない人々に戦えと言うのは押しつけだと思います。

執拗な子供虐待に耐えかねて親を殺害してしまったまりなの所業を糾弾できるでしょうか。

フィクションの登場人物を責めても意味ありませんが、もしまりなが身近にいたとしたら、もちろん安易に責めることは出来ません。

そしてそれは同時に、まりなが「大人」もしくは大人が存在しないのであればその背景にある何者かに対して「抵抗」した結果であることも認めざるを得ないでしょう。前にも書きましたが、これはこの作品の中で数少ない子供側の反抗のシーンです。

また、クラス内の虐めがエスカレートし、自身の愛犬を保健所で殺処分されてしまった上、自暴自棄になって首吊り自殺してしまうしずかの決断を止めることができるでしょうか。

それは…

止めましょうよ、としか言えません。

これは肯定的に捉えてはいけないシーンだと思います。タコピーもそれをなんとか回避するために、何度も何度も失敗を繰り返すのです。これも前記しましたが、ぼくはこの作品がその努力を否定的に扱っているとは思いません。

それがいかに悲劇的であろうとも、寄り添って見守っていくしかないのではないのでしょうか。

少なくとも作品の中でタコピーはそうは思っていない。

前述したようにタコピーは「助けてあげようとするだけじゃ、きっと違った」と独白します。そして、その先の決断において、最後の時間の巻き戻しで「魔法」を発動し、しずかとまりなを「おはなし」させ「ともだち」にします。

ぼくもこれは間違った判断だったとは思いません。

ゆえに今の社会にはこれが足りないとか、これに贖うとか一方的に押し付けるのではない関係を築いていくことも大切なことではないかと思っています。

押しつけないとは思いますが、それでは我々に出来る「助けてあげようとするだけじゃ」ないことは何か、ということですか。

田畑さんの見解ではタコピ―の介在そのものを否定的に見ていますが、やはりそうでは無いと思います。

タコピ―は確かに子供たちの未来を（「あるべき未来」とは言いませんが）、より「ましな」未来に変えました。それはこの作品を見た人々に対するメッセージなのでしょう。もちろんそれは難しい課題です。「助けてあげようとするだけじゃ、きっと違う」からです。

何よりタコピ―はしずかやまりなの身代わりになることは出来ません。

その意味ではタコピ―はその主体にはなれないのです。

どこまで行ってもその主体に対して働きかけるしかないのです。

どのように「おはなし」するのか、「おはなし」を実現するのか、どう「ともだち」を作れるようにするのか、そして彼女「たち」を大人にするのか、「おとなのいない世界」の中で負けないようにさせるのか、それは「大人」の側の責任であると思います。

◆世代論（あきらめの原初）

ぼくが今やれることは、まずはこの状況を理解することであり、それを他の人々に、出来れば若い人々に伝えることだと思うのです。

そこでぼくが「知っている」ことから始めるわけです。

いま起きている負の連鎖は、政治的に意図的に教育制度の中で作り出された結果です。

ぼくはその実際の状況をこの目で見て、体で体験しています。左翼だのどうだのではありません。戦旗派に出会う前からの話です。

ただこの話の前提から書いていく必要があるでしょう。

ぼくは、先にこの作品の登場人物たちは「あきらめきっている」と書きました。世代論の話になりますが、これはまさにぼくの実体験と実感に重なる話です。

ここでぼくの世代論について「決めつけ」と言われるかもしれませんが、自分の中で何かを評価するためには座標軸を持たざるを得ません。世代論を封印してしまったら、そもそも「Z世代」も「ドラえもん世代」も無くなります。まあそもそも、あいまいなくくりなんですけど。

続けます。拙速な書き方をしたので誤解を生んでしまったかもしれませんが、ぼくは、この「あきらめ感」というのはZ世代に限ったことでは無いと思っています。Z世代があきらめの世代だというのはなく、これはぼくの世代からずっと続く傾向です。

繰り返しますが、これは分析や論理ではなく、実際に関わった人達から感じた直感的な違和感がベースにあります。九〇年代の若者と交流した感想として、彼等には社会に不満があっても従順に従うかドロップアウトするかのみだけしか選択肢が無いように感じられました。つまり自分から世界を変えろという選択肢が無かったのです。

彼等はいわゆる氷河期世代に当たるのかもしれませんが、実はこの傾向は全く質の違うように見える「ドラえもん世代」、つまりぼくの世代から継承された傾向なのだと思います。

ドラえもん世代は諦めの世代ではありません。ただ、マルバツ式の選択肢しか持たない世代でした。あらかじめ与えられた選択肢しか見えない、自分で考えて答えを出すということを放棄したというか、教えられなかった

世代なのです。

ちょうど共通一次試験とマークシートが導入されたのがこの世代です。

おそらくそのことが、社会がもっと深刻化する中で「諦め」として結晶化していったのではないかと、ぼくは考えています。

煩雑になってしまいうけれど、ぼくの立ち位置を理解していただくために書きますが、ぼくは正確にはドラえもん世代ではありません。

というのは、マンガ「ドラえもん」は小学館の「小学五年生」から連載が始まりました。でもそれは、ぼくが六年生になった年なのです。一年違いですれ違っています。別の言い方をすると、ぼくが生まれたのは東京タワーが出来た直後で、ぼくが生まれてすぐ現上皇の「ご成婚」があり、その一年後にビートルズが正式に活動を開始しました。「宇宙戦艦ヤマト」は見られましたが、「機動戦士ガンダム」は大学に入った年だったので見る事が出来ませんでした。共通一次もぼくの次の年からで、ぼくは体験していません。

ベトナム戦争はぼくが生まれる前から始まっており、ぼくが高校生の時に終わりました。

ついでに言えば、ぼくの学生時代にはコミケありませんでしたし、オタクという言葉もありませんでした。だからぼくはオタクではありません。（※実際にはすでにあったが超マイナーだったー追記…弥生）

何が言いたいかというと、ぼくはちょうど安保世代とドラえもん世代の端境期にいたということです。

ぼくより上の世代は反抗、反逆の世代でした。高校の部室棟にもアジビラが残されており、民生系の学生運動の名残が残っていました。当然、大学にもタテカンあるのが当たり前で、活動家がメットでアジっているのは普通の風景でした。

ぼくは反逆の世代と従順の世代のちょうど中間にいて、どちらも身近に見て、感じて、体験したのです。

それは、なぜそこで大きな世代の転換が起きたのかを直接知っていると言うことです。

それではなぜ、ぼくの年代を境に若者の考え方、生き方が変わったのか？

それは大きな圧力がかったからです。

高校でも大学でも入学時と卒業時では、状況は大きく変わりました。高校時代の学生の自由が劇的に失われていった体験、大学での大学再編Ⅱ筑波化の進行、右派学生の左派に対する暴力的な妨害。今年トランプがハーバードに対して行ったのと同じ事が実際に目の前で起こっていたのです。

田畑さんがおっしゃるとおり、圧倒的多数の学生は強い流れに逆らいはしません。それが流れだとさえ思いません。ただ言われたとおり従順に従うのです。

その結果、この文章で「ドラえもん世代」と呼んでいる世代は、当時はシラケ世代とか三無主義とか呼ばれる無気力にして無抵抗の脳天気な世代となりました。まさに「のほほん」です。そして「のほほん」な人々はそのこと自体に無自覚です。無自覚で済まされる状況が作られたのです。

でも、ぼくは実体験として知っています。これは政治が意図的に作り出したもののなのです。

そして、それは負の連鎖として継承され、無抵抗な諦めの世代が形成されていったのです。すぐに人々は「のほほん」ではいられなくなりましたが、しかし反抗・反逆の牙は抜かれたまま、ここまで来てしまいました。

それが残されているのは唯一「文芸」の中だけなのかもしれません。

◆主体にならない当事者として

今まで語ってきたことを踏まえて、次の点を考えたいと思います。

「失われた三十年」というワードは、（中略）経済的にも政治的にも国家が国民を庇護できなくなった、という機能停止に陥った時期ではないかと思っています。

それ自体は現象的にはそうだと思いますが、それは受動的に捉えてよいことなのかどうか、もう少し考えたいです。つまり「国家が国民を庇護できない」という一方的な関係なのか、ということです。

近代主義国家は国民主権を基本にします。主権者は国民であって、国民は国家を変えることが出来るというのが本来のあり方です。国家は彼岸にある絶対的な存在ではありません。

これは別に左翼的でも何でもなく、日本国憲法に則った考え方です。

そうである以上、もし国家が機能停止に陥ったら、それを作り直し、立て直すのは国民の権利であり義務でしょう。それを怠ることの方が非難されるべきです。

この作品の登場人物は確かに小中学生に過ぎません。子供たちにその責任を負わせることは出来ません。（もちろん、七〇年安保闘争時のように、光州蜂起時のように、極めて若い人々が立ち上がることで自体を否定するものではありません。）

しかし、この作品の鑑賞者の中にはそうでない層が少なからずいるでしょう。まさに、鑑賞者は現実の世界においては、傷つく子供たちを前にしたタコピーの立場に置かれているのであり、そのことが突き付けられているのではないのでしょうか。

前半にタコピーは「文芸」ではないのかとも書きましたが、これはもう一つの視点です。作品のストーリーとは全く外れますが、そういう受け止め方も出来るかとも思いました。

タコピーは無力です。初めは自分が無力であることにさえ気づきません。

それでもしずかやまりなを助けようと思います。

そして失敗します。

役に立ちません。

さてどうするのか。

それは、そのまま鑑賞者たる我々の姿なのかもしれません。

V 田畑久志の返信2

お忙しい中、また残暑厳しき折にも関わらず、ご返信頂きありがとうございます。

このタコピーを巡る対話も四回目ということで、作品を見る視点や省察も大分深まってきたのではないかと思います。

○タイザン5という作家性

まず、外枠の話というか、この「タコピーの原罪」作者であるタイザン5について。二〇二〇年から「少年ジャンプ」本誌にて連載していた「一ノ瀬家の大罪」が昨年打ち切りになったそうです。

タコピーの連載が「ジャンプ+」というWEB媒体でしたから、作者にしてみれば、本誌のハードルが高かった

ということが言えるのですが、「少年ジャンプ」の言わずと知れたアンケート至上主義が、この作者の作風を良しと認めなかったというのが理由のようです。（柳田芒氏のnote記事「一ノ瀬家の大罪の打ち切りの報を受け」より）

「少年ジャンプ」という「ブランドと媒体読者層と作風が合っていないことは連載前から明白」だったのに、「少年ジャンプ」本誌に掲載したから打ち切られてしまったのですが、この柳田氏の記事の中で、「重たい展開（トンネルになぞらえていました）に耐えられない人が多かった」という考察があって、ああ、なるほど、と思わず納得してしまいました。いくら良い話でも、みな重苦しい展開には耐えられないのですね。

もう一つ、タイザン5の初期読み切りで「キスしたい男」という作品があります。「ジャンプ+」サイトにて無料を読めますので、是非お勧めします。

この物語は、ハリウッド女優のアンジェリーナ・ジョリーとキスしたい「不純な」理由で、アメリカに行く旅費百万円をバイトで稼いでいるレオという青年が主人公です。彼には「にこちゃん」という友達以上恋人未満の女の子がいて、彼のとてもない夢を応援しているのですが、どういう訳か、レオは頑なに、にこちゃんを自分の家に招き入れる事を拒みます。（そういう親密な話になると、途端にレオは吐き気を催します）

なぜ、レオはにこちゃんを家に入れないのかについて、アメリカに行くための旅費百万円が貯まり、いよいよ明日出発するという前日に、にこちゃんがレオの家に押しかけ、部屋に強行突入するに及んで明らかになります。（この結末は、是非ご自身でお確かめ下さい）

タイザン5という作家は、私たちがZ世代と呼ぶ、今の若い世代の心象を上手く捉えていると思います。故に自身も傷つき藻掻きながら前に進もうとしているのでしょう。

さて、前置きはここまでとして、私は所詮、高卒現場労働者です。年齢だけは重ねておりますが、頂いた力作の長文に対して、残念ながら、逐一応接していく能力を持ち合わせてはおりません。ですので、あくまで所感というか感想の範囲でお話しさせて頂きたいと存じます。

○タコピーという魔法

まず、「タコピーが自分の命と引き替えに残した「魔法」であって、（中略）最後に過去に戻ったしずかたちは、タコピーが存在しなかったままの世界にいるわけではないのです。」というくだり。

私は、アニメを見始めた当初、ご指摘頂いた通り、タコピーがいなければすべてが上手く行ったというような観方をしておりました。しかし、最終話に近づくにつれて、心情が変わっていきました。だいたいタコピーに感情移入してしまったと言った方が良いと思います。

よく、オラオラ系の人達が、よく相手を煽る時に「このタコが」とか言いますが（そういえば、渥美清の「寅さん」も、よく言っていましたね）、タコピーというのは、見た目もその存在も「タコ」なのですね。こういうメタファー表現というか、キャラクター設定からして、既に物語のレトリックに取り込まれているのです。

そういう訳で、いじられキャラであるタコピーは、「脳天気」で「バカ」で「ゴミ」であるが、「優し」くて「純真」で、どこか「ほっとけない」存在として、視聴者である私たちに強烈なインパクトを残します。

もちろん、過去を行き来して、実際には会ったこともない存在になったとしても、この個性は、しずか、まりな、東の心にインプリント（刷り込み）されているのであって、どこか懐かしく、愛くるしい思いを抱く訳です。

これは極めて映画的な手法であって、例えば岩井俊二の「ラブレター」は、実際には会ったこともない、違う時代を生きた少女と男性が、ある郵便受けを通じた「文通」によって心を通わせるストーリーですが、こうい

うジブナイルな気持ちに寄り添う感性が、今の若い世代には刺さるんですね。

弥生様が仰る通りタコピーの「魔法」は「絆」であり、「他者への眼差し」であると思います。だから、これを「魔法」と言うか、「メルヘン」・「文芸」と言うか、は別にして、読み手（視聴者）の感性に、タコの印象と、少年・少女三人にほんの少し明るいミライが伝われば、作者の目論みは果たされたということだと思っています。

○イジメの構造

二つ目はイジメの問題について。

「自己評価が低いということは単純なことではありません。（中略）彼等はともかく一旦は相手を見下さないとられない。それは自分が虐げられている分だけ、自分も虐げる相手を欲していると言うことです。」というご意見についてですが、最近の広陵高校を巡る一連の騒動をニュースなどで見ていて、身につまされる思いでした。

夏の全国高校野球に広島代表として出場した広陵高校は、ことし一月に複数の野球部員がそれぞれ個別に下級生の部員に対し暴力を伴う不適切な行為をしたとして日本高校野球連盟から三月に厳重注意を受けていたと発表したものの、一回戦に出場し甲子園で勝利します。

しかし、SNSなどで暴行があった一月以降にも陰湿なイジメが続いていた事や、監督以下組織ぐるみで隠ぺいしようとしていたことが、次々と明らかになることによって、校長が記者会見を行い、ついに二回戦以降の出場を辞退することになりました。その後、その校長自身も広島県の高野連会長で、イジメ隠ぺいに一役買っていたことが発覚しました。

私も学生時代に陸上部に入っていましたので（この辺の出来事は、拙文「走ることの意味」でも少し触れて

いますが）このようなイジメの構造については肌感覚で理解しています。慣習的なパシリの関係などは、どの学校でも「伝統」のようになっていて、代々引き継がれていくものだと思います。

ただ、今回は野球部の甲子園出場がかかった時期で、この問題が表面化しないように監督以下関係者の大人が組織ぐるみで隠そうとしたことが一番の問題だと思います。

タコピーでも、クラスの中で平然と行われているイジメに、不干渉な担任の先生が描かれていました。差別を見て見ぬふりし（あまつさえ隠べいする）、手を差し伸べることもしない大人が、差別を助長し、分断を固定化させるということを、忘れてはいけません。

その場合、弥生様が仰る通り「自分がされて嫌なことは他人にもしない。つまり他者が存在しそれを自分のこととして想像する」という事が核心だと思います。

更にいえば、タコピーが「もうひとりじゃない君達が大人になれるように」と言った意味は、不倫したり子供に不干渉だったりする周りの大人を反面教師として、人の心を持った、痛みを知る「ちゃんとした」大人になってほしいということ、なのではないでしょうか。

○タコピーの真意について

三つ目は「助けてあげようとするだけじゃ、きっと違った。」というタコピーの真意について。

ここは、いまの様同様、私もよくわからなかったので、また安易にChatGPTに聞いてみました。

要約しますが、タコピーの行動は、子どもらしい純粹さと無邪気さで「みんなを幸せにしたい」という願いから出発しています。しかし結果的に、その無垢さが残酷さを生み、悲劇を拡大しました。

ここでの気付きは、「助けたい」という意志だけでは不十分で、相手の立場や心情を深く理解しなければなら

ないという点。つまり、タコピーは最後に「自己満足の救済」と「相手本位の共感」の違いを悟ったわけですから。まさに教科書のような模範解答ですが、「相手本位の共感」については、もう少し掘り下げていく必要があると感じます。

タコピーは最後まで「ハッピーをあげる」ことにこだわりましたが、それはあくまで「自分が考える幸せを与える」というスタンスでした。

つまり、タコピーの行動は「自分が相手を幸せにしてあげる」という構造で、相手が本当に求めているものを理解しようとはしていませんでした。

これが「自己本位の救済」であり、結果として相手の苦しみを見做すことにつながりました。

一方「相手本位の共感」とは、相手がどんな痛みを抱えているのか、何を必要としているのかに耳を傾け、その上で一緒に考え、選択していく姿勢です。

共感というと「相手と同じ気持ちになること」と誤解されがちですが、実際には完全に同じ気持ちにはならないのが現実です。その上で「わからないけど、わかってもらう」「わからない痛みを見做しない」という態度こそが「相手本位の共感」です。

タコピーは人間の複雑さを理解できなかったがゆえに、相手の「孤独」「絶望」を直視できませんでした。もし「わからないけど知りたい」という姿勢を持てれば、悲劇の一部は避けられたかもしれません。

タコピーは常に「問題を解決してあげる」ことを目指しました。けれど人間の苦しみは、外部からの解決策だけではなく、一緒に背負ってくれる存在がいること自体が救いになる場合も多いです。つまり「相手本位の共感」とは、必ずしも答えを与えることではなく、「相手の感情に寄り添う」「一緒にその時間を過ごす」「解決できなくても孤独ではないと感じさせる」そうした関わり方を意味します。

ラストのタコピーの気付きは、「解決してあげる存在」ではなく「隣に立つ存在」であるべきだった」という反省に近いです。これは人間社会でも普遍的な教訓で、「家族関係」「友人関係」「教師と生徒の関係」SNS上の「善意のアドバイス」など、様々な場面で「相手のため」と思いながら実は「自分の満足のため」に動いてしまう構造が繰り返されています。タコピーは最後にその可能性を悟りましたが、すでに時間は戻せない、その痛みが「原罪」というタイトルに響いていると考えられます。

以上、生成AIの技術力はすごいなど、思わず感嘆するばかりです。

最後に、私の前回の応接で、意味が違って伝わっていると感じた部分について、何点か弁明しておきます。

○ダイアローグの地平

①「首吊り自殺してしまうしずかの決断を止めることができるでしょうか。

それは… 止めましょうよ、としか言えません。」

私は決して自殺擁護論者ではありませんので、サルトルの自問みたく自殺する人を前にしたら、間違はなく止めます。そうではなく、しずかの決断を支持はしませんが、安易に止めるのではないやり方で、彼女の痛みに寄り添いたいと感じたので、あのような表現になってしまいました。

②「田畑さんの見解ではタコピーの介在そのものを否定的に見ていますが、やはりそうでは無いと思います。」これは前述しましたが、当初の感想から終盤に至る過程で、タコピーの人物像（というかキャラクター像）に変化が生じ、珍しく感情移入してしまったため、最後はタコピーがいなくなってしまうことに若干感傷的にな

りました。介在についても無意味ではなく必要な行為だったと思います。

③ 「田畑さんがおっしゃるとおり、圧倒的多数の学生は強い流れに逆らひはしません。それが流れたとさえ思いません。ただ言われたとおり従順に従うのです。」

大学再編＝右傾化という文脈で書かれているので、特に弁明というわけではないのですが、私が戦旗派に結集したのが八〇年代後半でしたので、いわば「ドラえもん世代」ということになるのでしょうか、私としては決して無抵抗で諦めの世代という自覚はありませんでした。ただ、私の上の世代の人たちは何となく怖いイメージを持った人たちでしたね。

④ 「「国家が国民を庇護できない」という一方的な関係なのか、ということです。」

「失われた三十年」というワードの捉え方についての議論でしたね。日本がバブル崩壊を経て低成長になり、国際的地位が低下していく中で、経済の悪循環が人の価値観にまで浸透し、次第に蝕んでいくという意識で、このような表現になったのだと思います。

低成長期しか経験していない世代に、国の行く末を任せられるのかと。

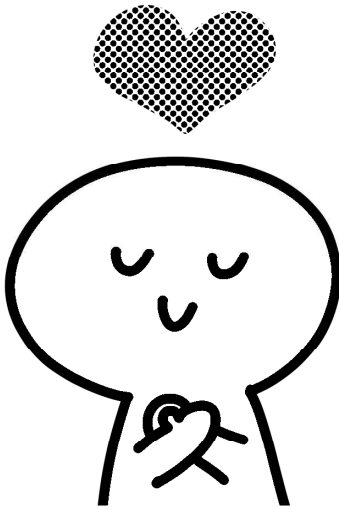
ただ、これは論理の飛躍があって、一時代の世相から国家の問題に至るとい訳にはいかず、様々な局面を経ている訳で、議会制民主主義の問題とか、国際関係の枠組みなど、議論していく余地は多いと思います。

以上、まとまっているかは分かりませんが、今回お送り頂いた文書に対する感想について書き連ねてみました。私としては、多少食傷気味ではありますが、自分なりの考察を深めるいい機会になったのではないかと思います。

す。

このように、自由に議論しあえる環境は大切ですね。

では、またの機会に。



(2025.09)